

『草薙神劍』 作 やまかわきとみ

初演 二〇二四年 十一月二日 名古屋能楽堂

【第一場】

〔天武天皇 大蛇 火の神 水の神〕

天武天皇・皇子 麗し瑞穂の 国継ぎて 若木に問わむ 月影の

地 謡 麗し瑞穂の 国継ぎて 若木に問わむ 月影の

天武天皇 そもそも是 天武天皇とは我が事なり

さても朕、壬申の乱を征し、平なる国を成しし今こそ、

国の歴史を書物に編みて、後の世に残さばやと存じ候

神世より 麗し国継ぐ月影の 若木に問わむ 国の道行

因って今宵は、汝らと国史の要について語らふと思ひ候

皇子 慎みて申し奉り候。国史の要は数々あれど

先ずは帝の御しるしにつき、その謂れを明らかにすべしと存じ候

帝の御しるしなる三種の神器。とりわけ伝え事の多きは、草薙神劍なり

天武天皇 げにげに 其伝え事 此方へ申し候へ

皇子 畏まつて候

天武天皇 そも草薙神劍は

地 謡 そも草薙神劍は 出雲の川すじ暴れ居る 八岐大蛇の内に有り

オロチ 我は八頭八尾 越の国よりまかりたる オロチの末弟にて候

兄蛇は七人の媛を食い 末なる媛を探し居る

地謡

邪氣漂うオロチの眼

邪氣漂うオロチの眼 クシナダヒメに寄りたれば

天より下りしスサノオが 八つの酒榼 オロチに与ふ。

大蛇

酔いしれるオロチ刻みし劍

酔いしれるオロチ刻みし劍 硬きに当たりて 欠けたるに

切り裂き尾より現るは 雨叢雲劍なり

八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣つくる その八重垣を

地謡

嗚呼 口惜しや 口惜しや

口惜しや 口惜しや

オロチが育てし極上の劍をスサノオごときに奪われるとは耐へがたいことじやなあ

あの劍さえあれば、人間どもの営みなんぞ 根こそぎ浚えてくれようぞ

其の上スサノオは、高天原に上って天津神にあの劍を捧げたとな

天照大神が相手では、我らが致そう手立てが無い

やい。すれば汝はあきらめると言うか

いいや あきらめてなるものか
しばし時を待って必ずや手に入れてくれようぞ

嗚呼 それがよかるう

火神

水神

火神

水神

【第二場】

「天武天皇 皇子 火神 水神 日本武尊 オトタチバナヒメ」

天武天皇 さても神劍 スサノオノミコトが大蛇の尾より取り出し 姉神様にあらせらるる

あまてらすおみかみ

天照大神の手に渡りたるとは いかにも尊き事

あねかみさま

皇子 そののち時を七百年ほど下りて

第十二代景行天皇の御世に 神劍持ち給ふ皇子のおはし候

そうろう

皇子 その名も日本武尊なり

火神 やあやあ なんとどうぞ それは誠か

水神 やいやい聞いたか 聞いたか

何事じゃ。何事じゃ

火神 何事ということがあるものか。人の小童がああ神劍を授けられたとな

水神 聞いた 聞いた 東方征伐に赴いて 伊勢の祠に寄つたるところに

あまてらすおみかみ

天照大神の御霊預かる 倭媛より与へられたとおことや

火神 如何に劍の神力借りるとて

一人ばかりなる人が この世を治むるなんぞ能わぬものじゃ (笑)

ああ

嗚呼 片腹いたや 腹いたや (笑)

火神 痛やの 痛やの

地謡 尾張にて 建稲種なる副将と あまた兵得たる尊

ヤマトタケル 神劍確かと腰に差し 川縁にて矢を作り 駿河の野辺に着きにけり

オトタチバナ 是はヤマトタケルが妃オトタチバナとは我が事なり

ミコトの東征助けむとて 倭を發ちて 今し尊に追ひつき申し候

ヤマトタケル 嬉しきことを申すなり

さてもこの辺りの大鹿 駿河の民の恐るるところに聞けり
汝弓の巧なるに ともに狩りに出らむや

火神

いや この時節逃すまじ

賊謀りて、野火放ち、今こそ神劍奪ふなり

地謡

賊に囲まれ野火迫る 其時神劍 目眩むほどに 光て草を薙ぎ払ふ

その上疾風巻き起こり 炎返りて 賊滅びたり

此類稀なる神器なり 此草薙神劍と名付くなり

地謡

そののち尊 相模にて 上総に往かむと海眺む

水神

ヤマトタケル 是小さき海 走り跳ぶにも易きなり
(笑) 人なる小童めが 此の海を 走り跳び渡るとな

然らば 我らが 大風起こし 浪を蹴立て 即ち神劍 奪はむや

水神

人に此国渡すまじ いざ乗り給へ 乗り給へ

水神

オトタチバナ にわかには妖しき氣配有り

地謡 にわかには怪しき氣配あり。是 海神の心なり
願はくは 尊の命に代はりて、自ら海にこの身を沈めんと

水神

オトタチバナ さねさし さがむの小野に燃ゆる火の 火中に立ちて 問いし君はも

地謡 これを最後に オトタチバナ 海の藻屑と成りにけり
時に神劍輝きて 浪風おさまり船行けば 尊 上総へ渡りけり

浜はまに立ちて眺ながむれば 浪なみに漂ただよふ媛ひめの櫛くし 掬すくい上げ掬すくい取り
入いり日に翳かげし嘆なげかるる 入いり日に翳かげし嘆なげかるる

火神さて 扱さても扱さても 人の小童こわらわを相手に斯か様に手かこずるとは腑ふに落ちぬことじゃ。

これには何しぞ仔細さいのあることか。

ちと天界てんかいより真実しんじつを探たつて様子ようすを見よう。(扇あふで検索)

成程なるほど、彼の皇子かみこは、只者ただものではない。

幼こき頃ころより気性きしょう猛々たけだけしく、姿すがた大きく、怪力かいりきであった。

更さらには わずか十六との歳とに帝みかどの命いのちを受け、西国せいこくへ平定へいぜいに赴おもむいたとある。

美濃みのと尾張おわりから召めした弓ゆいじんの名人なまを三人くまそばかり従したがえて、熊襲くまその国くにに着くくやいなや、

勇猛ゆうもく名高なき頭目とうもくの 熊襲くまそ梟師せうしが宴うたげを開ひらくと聞き知きつて、

皇子みこは髪かみを解とき、童女おとめの姿すがたに変かえてその宴うたげに紛まぎれ込み、

衣ころもに隠かくしたる剣つるぎを、梟師せうしの胸むねに一突つき！ (所作)

梟師せうしは皇子ちりよくの知力ちりよくと勇氣ゆうきに恐れ入り、

日本武尊やまとたけるのみことの名なを皇子みこに奉たてまつつて ことキレた、と、ある。

また、其その帰かへりには、吉備きびの穴海あなのうみと難波なんばの柏かしわのわたり 濟わたの荒あぶる神かみを平ひららげて

水陸すいりく兩路りゆうの道みちを開ひらいた と ある。

ううむ。彼奴きやつが、神劍かみつるぎに選えらばれし者とあつたならば、

我われらも腹はらを据すえて思案しあんをせねばなるまいが 何なにとしたものであろうぞ。

のうのう。水みづの神かみ 居おるか。居おるかやい。

水神 なんと 呼んだか。火の神。

火神 汝呼び出す別のことでない。今しがた例の子童の様子を探ったれば、
ただもの

只者にはあらず。如何したかと思つてまず 汝を呼び出したものよ。
ただもの

水神 いや。彼奴が妃のオトタチバナヒメも只者にあらず。
それがし

某、相模の海で神劍を奪わんとしたれば、
ふねもろとも

舟諸共に海に引きずり込まれたわ。

火神 (笑) まずはその様なことか。水の神が溺れたとあつては 河童の川流れ。
おぼ かっぱ

まさに型なしじやな。(笑)

水神 いや。あのヤマトタケルなる皇子は、女人に護られると見えた。
によにん まも

ことによるとあの神劍には、天照大神が宿るやも知れぬな。
みつるぎ あまてらすおのみかみ やど

火神 成程、伊勢の国で天照大神の御霊を祀る倭姫といい、
なるほど あまてらすおのみかみ みたま まつ やまとひめ

また弟橘媛といい、
おとうとたちばなひめ

天にも地にも、女人の扱いというは、一筋縄ではいかぬものじや。
によにん あつか ひとすじなわ

水神 そうじやそうじや。しからばこの上は、我ら天地悪神の妖力を靈山に集めようではないか。
れいざん きやつ

火神 おお、それは名案じや。その靈山に彼奴を誘い出して、迎え撃つとしようぞ。
れいざん

水神 善は急げじや。

火神 急げ急げ

水神 合点じや。合点じや。

火神 急げ急げ

水神 合点じや。合点じや。

火神 急げ 急げ・・・

【第三場】

〔天武天皇 皇子 ミヤズヒメ〕

天武天皇 如何に誰かある

皇子 御前に候。

天武天皇 その後 日本武尊 如何様に成り給ひしぞ

皇子 房総廻り 磯行けば 尾張の水軍 成合て 尊 陸奥へ入り給ふ

地謡 王船の舳先に懸けたる大鏡 尊掲げし神劍の 神々しく光けり

是を遙かに仰ぎ見て 蝦夷恐れて戦はず

皇子 劍の神力及びたるや 鄙の国をば平らげて 尊は帰路につき給ふ

地謡 武蔵上野廻り来て 碓日嶺に“吾孀はや”と 媛偲び

皇子 信濃に入りて山高く 白鹿と化り 立ち塞ぐ 山神をも 退けり

地謡 人馬進まず霧深し 忽ち道を失ふも 白狗現れ導くや

皇子 これぞ神器の証なり

地謡 美濃の峠に早馬の 悲しき報せは 副将の

皇子 建稲種の討報なり

尊驚き うつつかな うつつかなとぞ 嘆かるる

地謡 その後 尊 ミヤズヒメを思いやり

ミヤズヒメ待つ尾張の国へと 足を速め給ふなり

ミヤズヒメ 是は尾張の国造が女 ミヤズと申し候。

扱も我が兄 建稲種。駿河の海にて 虚しくなり給ふこと

久米八腹がしらせたり いと口惜しう嘆く間に 尊 尾張に着き給ふ。

地謡

契り叶ひて床の辺の 月を愛でるも東の間に
契り ちぎ 叶ひ かなひ 床 とこ の 辺 べ の 月 つき を 愛 め でるも 東 あづま の 間 ま に
胆吹の山に荒ぶる神 甚だ多しと聞し召し 神劍残して發ち給ふ
胆吹 いぶき の 山 やま に 荒 あ ぶる 神 かみ 甚 はなは だ 多 おほ し と 聞 き し 召 め し 神 かみ 劍 つるぎ 残 のこ して 發 た ち 給 たま ふ
萱津に有りて 差し仰ぐ
萱津 かやつ に 有 あ り て 差 さ し 仰 あお ぐ
(破之舞)

ミヤズヒメ

萱津に有りて 差し仰ぐ
萱津 かやつ に 有 あ り て 差 さ し 仰 あお ぐ

地謡

胆吹の山に 白たへの
胆吹 いぶきの の 山 やま に 白 しろ た へ の

ミヤズヒメ

かかりし雪に言問ふも
か か か り し 雪 ゆき に 言 こと 問 と ふ も

地謡

かかりし雪に言問ふも 打ち寄すさぎ浪 応へせず
か か か り し 雪 ゆき に 言 こと 問 と ふ も 打 う ち 寄 よ す さ さ ぎ 浪 なみ 応 こた え せ ず

胆吹神に崇られし 尊の身体痛まれり
胆吹 いぶきの 神 かみ に 崇 た ち ら れ し 尊 みこと の 身 み 体 からだ 痛 いた ま れ り

倭に待たれし帝への 奏上さえも叶わずに 伊勢の能褒野で身罷れり
倭 やまと に 待 まち た れ し 帝 みかど へ の 奏 そう 上 じやう さ え も 叶 かな わ ず に 伊 い 勢 せ の 能 の 褒 ほ 野 の で 身 み 罷 ま れ り

陵より出て白鳥の 大空を飛び廻り来て はるか故郷を偲び給ふ
陵 りやう より 出 い て 白 しろ 鳥 とり の 大 おお 空 そら を 飛 と び 廻 めぐ り 来 き て は は る か 故 こ 郷 きやう を 偲 しの び 給 たま ふ

ミヤズヒメ

倭は 国の真秀 置なづく青垣 山籠れる 倭麗し
倭 やまと は 国 くに の 真 ま 秀 ほ 置 た な づ く 青 あお 垣 がき 山 やま 籠 こも れ る 倭 やまと 麗 うるわ し

地謡

嬢子の床辺に 尊の置きしその大刀の なほ靈妙に光けり
嬢子 おとめ の 床 とこの 辺 べ に 尊 みこと の 置 お き し そ の 大 た 刀 たち の な お ほ 靈 れい 妙 みやう に 光 かが け り

則ち祀らむや 則ちここに祀らむや
則 すなわ ち 祀 まつ ら む や 則 すなわ ち こ こ に 祀 まつ ら む や

地謡

はるか古 神劍は 神より人に 託されり
は は る か 古 いにしへ 神 かみ 劍 つるぎ は 神 かみ より 人 ひと に 託 たく さ れ り

東に通ずる 道拓き 湊備へ 海訪ね
東 あづま に 通 つう ず る 道 みち 拓 ひら き 湊 みなと 備 とのえ へ 海 うみ 訪 たず ね

還りて尾根の 遙かなる 眺めに誓ふ 国つくり
還 かえ り て 尾 お 根 ね の 遙 はる かな る 眺 なが め に 誓 ちか う 国 くに つ くり

行き交ふ民とて 永久に 安らかなり 豊かなり
行 ゆ き 交 かう ふ 民 たみ と て 永 とこ 久 しえ に 安 やす かな り 豊 ゆた かな り

尾張国の年魚市 郡 熱田宮におさまれる
尾 お わ り の 年 あ ゆ ち の 魚 こ 市 ちやう 郡 あつた の 宮 みや に お さ ま れ る

これ草薙神劍なり これ草薙神劍なり
こ こ れ 草 くさ 薙 なぎ 神 かみ 劍 つるぎ な り こ こ れ 草 くさ 薙 なぎ 神 かみ 劍 つるぎ な り